

J.F.フリースにおける哲学方法論の問題

太田匡洋 (Tadahiro OOTA)

京都大学大学院文学研究科

本提題の目的は、ヤーコプ・フリードリヒ・フリース (Jakob Friedrich Fries, 1773-1843) の哲学を取り上げ、特にその哲学方法論との関わりから、フリースの哲学の概要を確認するとともに、その後世における受容状況を概観することである。

J.F.フリースは、おもに 19 世紀前半の「ドイツ古典哲学」の時期に活躍した哲学者である。主著『新理性批判 (*Neue Kritik der Vernunft*)』(1807) および、その改訂版である『新・人間学的理性批判 (*Neue oder anthropologische Kritik der Vernunft*)』(1828-31) によって、その名を知られているほか、ラインホルト・フィヒテ・シェリング、そしてヘーゲルに代表される「ドイツ観念論」の潮流に対して、批判的な立場を形成した点に、その特色が認められる。現在でこそ忘れられがちな哲学者であるが、二度にわたる「フリース学派」の勃興のうちに、同時代における存在感の大きさを見てとれるほか、「フリースのトリレンマ」に代表されるカール・ポパーによる度重なる言及や、宗教哲学者のルドルフ・オットーによる受容など、端々においてその影響力の大きさを垣間見ることができる。

フリースの立場の特徴は、カントの批判主義の力点を、人間的認識の有限性の重視のうちに見出して、この観点から批判主義の立場を徹底化しようとした点に見てとることができる。他方でフリースは、カント哲学の欠陥を、カントの哲学方法論のうちに見出しており、この哲学方法論の見直しのうちに、自身の哲学の課題を認めている。フリースは、「哲学的な認識とは、初めて発見されて、一人の人間によって初めて新たに学ばねばならないものではなく、あらゆる人が哲学的な認識を所有しており、思考すべてにおいて日常的に適用している」と主張したうえで、しかし「自分がそれ [哲学的認識] を知っているということは意識していない」のだと指摘する。この観点からフリースは、「背進的方法 (*regressive Methode*)」ないし「分析的方法 (*analytische Methode*)」を採用することで、「通常経験の立場」から、すなわち「日常生活における通常諸判定 (*die gemeinen Beurteilungen im täglichen Leben*) の立場」から出発することの必要性を訴える。そして、「通常諸判定」の「分析 (*Zergliederung*)」ひいては「抽象 (*Abstraktion*)」を通じて、これらの「通常諸判定」の一般的な諸前提をなしている「哲学的な認識」を明らかにするとともに、これらの認識を「意識」へともたすことの中に、哲学の課題を認めている。さらにフリースは、これらの方法論を「理性」と「悟性」というカント以来の認識能力の区分へと基づけることで、自らの立場の正当化を行っており、このような脈絡のもとで、哲学を支える学問分野としての「経験的心理学」および「哲学的人間学」の重要性を強調している。

上述のようなフリースの哲学方法論は、今日に至るまで「心理主義 (*Psychologismus*)」ないし「カントへの心理学的アプローチ」と見なされて、批判的な評価を受けてきた。これらの評価は、同時代のヨハン・フリードリヒ・ヘルバルトやフリードリヒ・エドゥアルト・ベネケらによる批判的受容まで遡るものであり、

これらの状況を背景として、クーノ・フィッシャーやヨハン・エドゥワルト・エルトマンをはじめとしたヘーゲル主義者達によって、「カントによる探究を、経験的・心理学的、あるいは人間学的な探究へと変容させた」哲学者というフリース像が確立された。そして、このような解釈図式が、オットー・リープマンに端を発する新カント派に引き継がれることで、今日に至るフリースへの否定的評価が成立することとなる。

しかし同時に、このようなフリースに対する批判的動向にならぶ出来事として、フリースの支持者達による活動を、より具体的には、二度にわたる「フリース学派 (Fries'sche Schule)」の成立を挙げることができる。この二度にわたる「フリース学派」の成立を通じて、フリースの今日に至る影響がもたらされることとなった。

一度目の「フリース学派」の成立は、1847-49年の間であるとされており、フリースのもとで学んでいたエルンスト・フリードリヒ・アーペルト (Ernst Friedrich Apelt, 1812-1859) が中心となって、最初のフリース学派の論文集である「フリース学派論集 (*Abhandlungen der Fries'schen Schule*)」を発行していた期間に相当する。この最初の「フリース学派」の活動は、アーペルトの著作活動によって代表される。後のコーヘンやカッシーラーなどの新カント派の哲学者達や、後述するネルゾン、そしてポパー等によるフリースへの言及は、アーペルトの著作を参照しながら行われており、アーペルトがフリースを代弁する存在であると見なされていたことが見てとれる。このアーペルトによるフリース理解の特徴の一つとしては、「帰納 (Induktion)」の役割の重視を挙げることができ、この観点からアーペルトは「哲学と自然科学の架橋」および「ドイツとイギリスの哲学の主要な相違点」に重点を置いた記述を行っている。このようなアーペルトによるフリースの解釈姿勢は、とりわけ科学哲学の分野に一定の影響を残すと同時に、フリースに対する後世の批判を導いたと考えられる。

二度目の「フリース学派」、すなわち「新フリース学派 (Neufries'sche Schule)」の成立は、「フリース学派論集・続編 (*Abhandlungen der Fries'schen Schule, Neue Folge*)」(1904-) の新たな発行を翌年に控えた 1903 年に始まり、1913 年における「ヤーコプ・フリードリヒ・フリース協会 (Jakob Friedrich Fries-Gesellschaft)」の設立を経て、20 世紀中旬まで続いたとされている。この「新フリース学派」の活動は、ゲッティンゲンを中心に展開されており、フリースを“再発見”するとともに本誌の発行の発起人となったレオナルト・ネルゾン (Leonard Nelson, 1882-1927) によって代表される。ネルゾンは、当時隆盛を誇った新カント派との対立関係のもとで、「心理主義」というフリース理解に対して本格的な反論を行った最初の人物の一人であるとともに、フリース自身のキーワードでもある「理性の自己信頼」という概念に着目した独自の思想を展開しており、今日ではもっぱら哲学教育の分野において、「ソクラテス的方法」の提唱者として名前を知られている。しかし、ネルゾンが当時の思想界にもたらした影響は、広範囲におよぶものであり、その一例として、ポパーによるフリースへの度重なる言及がネルゾンとの交流に由来することなどを挙げることができる。

以上のような経緯のもとで、フリース自身の哲学的立場に端を発しつつも、後世における「フリース学派」の展開と、それらと対立関係にあったヘーゲル学派や新カント派の展開が、相互にもつれあうことによって、後世におけるフリースの受容がなされることとなる。